

## エメ・サル論末付記参照の研究(2)

吉 川 守

### B) Eme-sal の言語的性格

Eme-sal の sal には“女性”の意味は知られていないが、sal に用いられる楔形文字が、普通“女性”(mí, geme)を表わすので、eme-sal を“女言葉”として理解しようとする考え方は早くから行われていた。しかしながら、その想定を裏付ける資料は最近に至るまで得られなかった。

S. N. Kramer 教授、Gordon 氏等の新しい文学資料の解説公刊は、この女性語説を認証可能な見解として、次第に有力な説、というより定説化の方向に進展させた。

たとえば、A. Falkenstein 教授は Eme-sal の女性語的性格に關説して次のように叙べている (*Das Sumerische* p.18):

アッカド語で *lišān šilīti* „Streitsprache” と説明されている Eme-sal (アッカド語 *ummi-sallu*) は文語方言の中では特殊な位置を占めている。エメ・サルで誌されたテキストは *frühalt-babylonisch* の文学例の中に初めて在証される。物語り部分及び男性の対話部は *Hauptdialekt* で記されているのに、この言語形式は女性が話す時に使用されている。しかしながら、文学伝承以外に於いては、女性の談話にも Eme-sal は用いられていないので、Eme-sal は文語“方言”の中に含まれる。*Nachaltbabylonisch* (紀元前1600~100年) の時代には、従来 *Hauptdialekt* で作成されていた文学類の中にも Eme-sal は浸透し、或る種の作品では *Hauptdialekt* と Eme-sal との混合が特徴的である。——中略——。はじめ、両者 (Eme-KU と Eme-sal) の音声形の違いを時間的ずれに起因するものと看做し、eme-sal を後期の段階に属するものと理解したのであるが、この見解には根拠のないことが明らかになった。またわれわれは Eme-sal が非シュメール語的基層言語の影響のもとに形成されたとする提言に対する根拠を有しない。同様に、われわれは、エメ・サルが或る特定の土地の言葉であったということについて何も知らないのである。

同趣の見解は SAHG の序文の中 (p.28 - p.29) にも説かれている :

シュメール語の種々の詩歌を眺望して見ると、よく、土着の呼称で Eme-sal と呼ばれ、大体 “breite Sprache” のような意味を持つシュメール語の Sprachform に出会わす。一般の詩歌及び神話的、叙事詩的創作に於いては——われわれが主要方言と呼称している——非文学的の伝承の言語と一致する Sprachform が現われるのに、女性達は事実上女性語である特殊な方言 Eme-sal を話している。ここに於いてか、われわれはサンスクリット劇の規則との比較を直ちに強いられるのである。この劇に於いては、男達はサンスクリットを、婦人達はサンスクリットの新しい言語段階であるプラクリットを話しているのである。エメ・サルがもつばら文学的表現に保留された言語形式であるかどうかを、まだわれわれは確言することが出来ない。しかしながら、全体がエメ・サルで作られた、例えば Ershemma のような種類の歌は少なくとも起源的には女祭司或いは女歌手によって朗唱されたことは確実である。

Nachaltbabylonisch の伝承に於いて、僧職の男の代表者が Eme-sal の歌をうたい、更に Eme-sal 形式が、従来主要方言で作られていたテキストにまで浸透している限りに於いて、われわれはエメ・サルの増加しつつある使用に気付くのである。

A. Falkenstein の Eme-sal = 女性語の見解は、簡単ながら、この他にも GSGL, I. (=An. Or. XXVIII) p. 3, fn. 1 ; ZA XLIX (=NF 10) 16<sup>1</sup> ; OLZ XLV 455<sup>1</sup> で約説されており、同様な見解は、M. Witzel, *Keilschriftliche Studien (Leipzig-Fulda-Jerusalem)* II. 69 ff. にもうかがわれ、このような諸見解を踏まえて、最近では、(例えば) J. J. A. Van Dijk (*La sagesse Suméro-accadienne*, 1953, p. 89-90) が次のように断定的な強い表現を用いて述べている :

この方言 (=Eme-sal) に就いて、どのような意見を抱こうとも、今日ではエメ・サルが女性の言葉 (la langue des femmes) であることに同意するであろう。女神のみならず、女祭司もそうである。現在断定し得る限りでは、hymne, lyrique, épique 及び didactique に於いて然りである。それに反して、法律関係資料に於ける女性の言明は Eme-sal で書かれてはいない。

このような先学の指摘をそのまま承認するとしても、文学作品に於けるそのような eme-KU, eme-sal の使い分けが、当時に於けるシュメールの言語事情をそのまま作品の世界に再現させたものであるかどうかは一応疑ってかかる必要はある。

また、eme-sal = 女性語の見解が実証されても、そのような Eme-sal がどのようにして形成されて来たかという問題は解決されないままに残るので、今後の課題として攻究されなければならないであろう。すなわち、Eme-sal は Eme-KU が、シュメール

全土に亘って、多少の異質的要素を含みつつ、歴史的に形成された“口語”的性格を有する言語か、それとも特定の都市または地域に於いて、局地的に形成された“方言”的性格を有するものであるかどうかという問題である。

### I) Eme-sal に於ける異質性

Eme-KU の歴史に於いても、多くの語詞はその語形が常に単一でないことは、歴史的にも、共時的にも確認される事実で、たとえば“未亡人”を表わす語は、初期王朝時代末期の同時代の史料に次のような語形で現われる。nu-ma-su (Nikolski, No. 19; Ukg. Cone B & C. XII, 23 etc.) nu-mu-su (DP. No. 127, 8)。Gudea の碑文では更に na-ma-su の形 (Gudea, St. B. 7, 43) が見え、また後期には nu-um-un-su(-a), S. N. Kramer, *Two Sumerian elegies*, l. 23 及び nu-ma-nu-su の形も知られている。

註)

原形は nu-ma-su (<\*lú-maš-a ?) であろう。この語形から、母音の同化により、nu-mu-su, na-ma-su が説明出来る。na-ma-su はハンムラビ法典 (30, 22) にも見られる。〔註 終〕

叙上の如き事情は当然 Eme-sal に就いても予測出来るのであるが、従来のシュメール学者はこの点について触れるところがない。しかしながら次に指摘するような Eme-sal 内部に於ける異質性は、今後 Eme-sal の言語的性格を決定するに就いて重要な資料になるかと思われる。

例を CT. XV, pl. 26-27/CT. XV. pl. 30 にとって見よう (全文及びその訳文は省略) :

“CT. XV. pl. 26, 23-pl. 27, 25”

23) ÍD-da ÍD-da é-sig-ge-dam

1) me-e

DUMU

é-da

é-sig-ge-dam

2)-3) é-da è-sig-ge-dam

4) gisšū-úr-min-àm

5) e-me-da

“CT. XV. pl. 30, 1-Rs. 3”

2) i-da [i-da] i-sig-ge-da

3) ma-a

tu-mu

i-da

i-sig-ge-da

4)-5) i-da i-sig-ge-da

7) gisšū-úr-min-na

8) um-me-da

エメ・サルの研究 (2)

8)-10) sal im-ma-ni-dug <sub>4</sub>	10)-13) sal um-ma-ni-dug <sub>4</sub>
12) ma	14) me-e
ṭu-mu-mu	ṭu-mu-bi
i-ne-šē	ne-šē
ná-da	ne-da
13) ù-lul-la	15) ú-lu-lu
i-ne-šē ná-da	ne-šē ne-da
14) ù-lul-la i-ne-šē ná-da	16) ú-lu-lu ne-šē ne-da
18) i-ni-ná	19) i-in-NÁ
mu-ši-ib-za	mu-un-ši-ib-zal
19) i-ni-ná	20) i-in-ná
mu-un-ši-íb-ZAL	mu-un-ši-ib-zal
20) ṭu-mu-bi-ra	21) ṭu-mu-bi-ir
20-21) šu-mu-un-na-ni-in-bar	21)-22) šu-mu-un-na-ni-in-dè (?)
22) en-nu-un-gá	23) en-nu-un
22)-23) mu-un-da-ab-dù	23)-1) mu-un-da-ab-dug <sub>4</sub>

註)

\*ma-e <gá-e 《私は、が》 から母音同化により、me-e, ma-a, ma が生じた。Falkenstein は Eme-KU, gá-e の Eme-sal 形として me 一例を挙げている (*Das Sumerische*, p. 33)。

è-da, i-da に見える è 及び i は Eme-KU, id “河” に対応する。

pl. 27 に見える dug<sub>4</sub> に対する dù, zal に対する za は潜在子音を省略したものと考えられるが、dug<sub>4</sub> に対する eme-sal 形としては du<sub>11</sub>-ba 或いは zé-eb が措定されている。〔註 終〕

両テキスト間の内容上の差異は鮮少であって、これらは相互に Duplicate の関係にあると看做されるが、上に見る如く可成り明確な対立的徴条を示している。

pl. (26-)27 に見られる特徴は eme-KU/i/ に対する /e/ 化であり、pl. 30 に顕われた特色は eme-KU /i/ に対する /u/ 化である。この傾向は必ずしも截然と区別されず、その傾向が混濁しているような点も見られるが、いずれにしても、一口に eme-sal と言って見てもその内容は決して等質的でなかったことが窺知されるのである。

Eme-sal 内部に於けるこのような異質性はわれわれに何を示唆しているのであろうか。今後、検討されなければならない点であろう。

II) 術語としての Eme-KU, Eme-sal

われわれが今迄に論じてきた, Eme-KU 及び Eme-sal をバビロニア人自身はいかに認識し, どのように使用していたかを文献の中から摘出し, 検討を加えて見よう。

1) Eme-KU :

- i) Gordon, *Sumerian Proverbs*, 2.47.

dub-sar eme-KU nu-(mu-)un-zu-a a-na-àm dub-sar e-ne

((eme-KU を知らない書記は, 一体どのような書記であろうか?))

- ii) op. cit. 2.49.

dub-sar eme-KU nu-mu-un-zu-a inim-bal-e me-da hé-en-tùm

((eme-KU を知らない書記は, 翻訳をどこで手に入れることやら))

- iii) op. cit. 2.55.

kindagal eme-KU ba-an-zu-a

(( (彼は) eme-KU を知っているそば使いだ。))

- iv) Syria XIII [1932], p. 234, No.9, Obv. II, 17. (Thureau-Dangin)

MIN(=dub-sar)-eme-KU-ra

((Eme-KU の書記))

- v) RT XXXVI [1914] pp. 184. f. Rev. II 13 (Scheil)

[dub-sar]-eme-KU = *tupšar šu-me-ri*

- vi) JAOS, vol. 69 [1949] pp. 202 & 205 (40行)

(S. N Kramer : *Schooldays*)

lú-eme-KU-ra-ke<sub>4</sub> eme-KU………bí-in-dug<sub>4</sub>e-še in-túd-dè-en

((eme-KU 担当の先生が, eme-KU………話した, と言って, 叱った。))

- vii) ZA 4, 434. f.

……[e]me-KU níg-sig<sub>10</sub>-ga eme-sal

……[l]i-ša-an šu-me-ri tam-šil ak-ka[-di-i]……

(シュメール語である Eme-KU はアッカド語]である Eme-sal に似ている。)

上に挙げた諸例では dub-sar-eme-KU (-ra) が見られるが、それに対立する dub-sar-eme-sal の語は文献では在証されない。従って、これらの用例に見える eme-KU は eme-sal と対立的に用いられた用語ではなく、eme-KU をもってシュメール語全体を代表させた用語であると一応理解出来る。このことは用例 v) から窺われるが、この推定から eme-KU という呼称を、シュメール人が自分達の言語に対して反省的に名付けた名称ではなく、バビロニア人が、シュメール語を研究・学習するようになってはじめて名付けた名称であると断定することは、にわかには許されないかも知れない。

何故ならば、eme-sal を eme-KU に対する“口語”と仮定すれば——この蓋然性は高い——当時可成りの懸隔が存在した eme-KU をシュメール人自身“文語”として学習する必要があったわけで、用例 iii) は身分不相応に上品な eme-KU を知っている従者を揶揄したと考えられるので、eme-KU なる名称はシュメール人が自らの言語に与えた呼称とも考えられないことはないからである。

さらにまた、eme-sal を eme-KU に対する、或る特定の地域の“方言”と仮定して見ても、つまり eme-KU の対立言語はアッカド語であると解釈し、前掲の用例の作成者或いは作成対象はバビロニア人であると想定しても、上例はすべて合理的に解釈出来るのである。従って、以上の資料のみでは、いずれとも断定は出来ないであろう。

## 2) Eme-sal :

- i) cf. Falkenstein, *Das Sumerische*, p. 18.

eme-sal / um-mi-sal-lu

- ii) op. cit. p. 18.

eme-sal = *lišán šiliti* “Streitsprache”

- iii) 前出 (eme-KU の用例 vii) 参照)

eme-sal = *lišán Ak[kadī]*

iv) 未公開の Vokabular (cf. ŠL. 95, 2) Assur 1162. Rs. 2, 30 ff.

30) MUN a-ma-nim = *tâbat a-ma-ni*

31) MUN a-ma-nim = *tâbtu sa-an-tú*

32) MUN eme-sal-lim = *tâqat šadê°*

33) MUN kù-ga = *tâbat šadê°*

32) を R. Labat (Manuel. p. 83, § 95) は mun-eme-sal-la/lim *tâbat emesalli* ((sel impur)) として採録している。30) は ἄλς ἀμμωνιακόν に当る。

術語としての eme-sal の用例は僅少である。岩塩 (山の塩) を示すために、形容詞として用いられている eme-sal や喧嘩言葉と註解されている eme-sal は、明らかに eme-sal の“口語”としての“くずれた”形に着目した呼称であろう (sal は sal-la として、uru “vulva” の意である)。従って、eme-sal をアッカド語とする glosse も、もしア〔ッカド〕語の復原が正しいとすれば、シュメール人がアッカド人の間に同化していく過程に於いて話していた Spoken language としてのシュメール語を捉えた呼び名ではなかったかと考えられる。女性が話すとき、喧嘩の時に使う言葉とされるのも、そのように考えれば、非常によく理解される。

なお今迄に述べてきた五種或いは七種の eme の他に、次のような eme が知られているが、この eme の使い方はベルリン語彙に見える eme の解釈及び eme-sal の解明に示唆的である：

i) eme-má-lah<sub>4</sub> // *li-šá-an ma-la-ḫi* (A. Salonen, *Nautica Babylonica*, p. 1

= *Studia Orientalia*, XI, 1.)

ii) eme-udul

iii) eme-nu-ěš

ii), iii) 及び i) (DT. 147, Bezold, cat. 1555) は Falkenstein, *Das Sumerische* p. 18 にも引用されている。これらの語は、上から“船頭の言葉”, “牧者の言葉”, “nu-ěš 僧の言葉”と解釈されているが、この用語は位相語としてよりはむしろ、船頭, 牧者, nu-ěš 等が使う“専門用語”或いは“職業用語”の意味で理解すべきであろうと思われるが、後考を待たねばならない。

III) 文学テキストに於ける Eme-sal

I) 女性語としての Eme-sal

1) Gordon, *Sumerian Proverbs*. 1. 176.

ga-ša-an-túg-gal-gal-la-mèn túg-NÍG-ib-mu da-an-tar

《わたしは特大の着物を着なければならない女。腰帯など切ってしまいたい。》

この例で、ga-ša-an, mèn (或いは gen), da- はそれぞれ nin, me-en, ga- に照応する eme-sal 語である。ただし、NÍG が eme-sal 形 (em 或いは eġ, aġ) で書かれていない。上掲書で明らかに女性の言葉と断定出来るのはこの一例位で、他は女性の発話と看做した方が適わしいと思われるものに過ぎない：

2) op. cit. 1. 190.

uzu-i al-zé-eb

uzu-i-udu al-z[é]-eb

ta-àm gi<sub>4</sub>-in-na ga-an-na-ab-zé-è̄m-DU

《脂つきの肉はおいしい。羊の脂つきの肉はおいしい。私は一体何を女中に与えたらいいだろう。》

文尾の zé-è̄m-DU は zé-eġ-gen 或いは zé-è̄m-mèn を意図したものと考えられる。同様な用例としては 1. 192, 1. 144 を指摘出来るが省略。なお zé-eb, ta-àm, gi<sub>4</sub>-in, zé-è̄m はそれぞれ ùg, a-na-àm, gemé, sum に対するエメ・サル形。ただし、i (>u<sub>3</sub>), udu (>e-zé), ga- (>da-) は eme-KU で、それぞれ括弧内の eme-sal 形では書かれていない。

これらの例では女性が話す場合の Situation が明瞭でないが、Kramer 教授の “*Inanna's descent to nether world*. I, II (JCS, vol. IV, No. 4, p. 199 ~ 及び vol. V, No. 1, p. 1 f.) では、比較的よく知られる：

3) I.

4) a-ne mu-na-ni-ib-gi<sub>4</sub>-gi<sub>4</sub>

《彼女は彼等に答える》



- 5) *uzu-níg-sig-ga níg-ga-ša-an-zu-ne-ne-ka*  
 ((その死骸は、お前達の女王のものである。))
- 6) *níg-sig-ga níg-nín-me h́é-a sum-me-eb in-na-an-ne-ěš*  
 ((“その死骸が、女王のものであらうと、われわれに下さい” と彼等は彼女に言った。))

上例で、五行目の Inanna 女神が話す言葉は *ga-ša-an* と *eme-sal* 形が使われているが、それに対する *galla* 達の言葉では、それが *eme-KU* の *nin* の形に改められていて、その使い分けは鮮やかである。ただし女神の言葉中で、*níg* は (*eme-sal*) 形 (*è̄m* etc.) で書かれていない。同様な反例は次の対話部にも認められる。

- 34) *kù<sup>d</sup>-Inanna-ke<sub>4</sub> galla-e-ne mu-un-ne-ni-gi<sub>4</sub>-gi<sub>4</sub>*  
 ((聖なる Inanna 女神は *galla* 達に答えた。))
- 35) *ír du<sub>6</sub>-du<sub>6</sub>-dam ma-ni-gar-gar-re-en*
- 36) *šém gú-en-na ma-ni-in-tuk-àm*
- 37) *é-dingir-re-e-ne ma-ni-in-nigin-dè*
- 38) *igi-ni ma-an-ĤUR ka-ni ma-an-ĤUR*
- 39) *ki-lú-da-nu-du zú-gal-ni ma-an-ĤUR*
- 40) *lú-nu-tuk-gim túg-aš mu-un-mu<sub>4</sub>*
- 41) *é-kur-re é<sup>d</sup>-En-líl-lá-šè*
- 42) *Urí<sup>ki</sup>-ma é<sup>d</sup>-zuen-na-šè*
- 43) *[uru-]zír<sup>ki</sup> é<sup>d</sup>-Am-ki-ga-šè gir-aš mu-gub*
- 44) *én ta-gim nam-ma-ra-ab-zé-è̄m-e[n-zé-en]*

35)–44) 行は女神 Inanna の対話部で 44) 行に *ta* (<*a-na*), *zé-è̄m* (<*sum*) の *Eme-sal* 形が記されているが、下線を施した語はエメ・サルにその対応形を有する語であるにも拘らず、エメ・サルで書かれていない。そして、これに続く *galla* の回答の中には、かえってエメ・サル形が見えるのである：

- 45) *Umma<sup>ki</sup>-a še-eb-kur-ša-ba-šè ga-e-S[ÚG-en-dè-en]*  
 ((ウンマの *Sig<sub>4</sub>-kur-šag<sub>4</sub>-ga* まで貴女に、われわれはお供いたしましょう。))

エメ・サルの研究 (2)

以上は叙事詩の一部を紹介したに過ぎないが、この epic 全体に於ける eme-sal 使用の傾向を知るには充分である。つまり、Van Dijk が考えているように、女性語としての eme-sal と男性語としての Eme-KU の使い分けは、そんなに截然と行われていないのである。女性の談話部に eme-KU 形が混在していることは理解出来ても、男性の会話部に eme-sal 形が混入したり、次に挙げるように他の文に Eme-sal 形が書かれている事実は、女性語説のみでは説明が困難であるように思われる。

27) dumu-lú du<sub>10</sub>-ub-ta ba-ra-an-zi-ge-eš

《彼等は“人の子”を彼の膝から抱き上げた。》

74) kù-<sup>d</sup>Inanna-ke<sub>4</sub> súb-ba-<sup>d</sup>Dumu-zi-da šu-ne-ne-a in-na-sum

《聖なるイナンナ女神は牧者ドゥムジを彼等の手に与えた。》

下の例で、<sup>d</sup>Inanna は eme-sal 形 (<sup>d</sup>Ga-ša-an-an-na) で書かれていないが、súb(-ba) は eme-sal 形である。69) にこの Eme-KU 形 sipad-dè (= <sup>d</sup>Dumu-zi) が見える。

上に見るように、エメ・サルを出来るだけ女性の対話の文に用いようとしている意図の如きものを汲取ることは出来るが、このような意図が単に文学的な Stylistique である蓋然性をあながち否定することは出来ず、さらに検討が必要かと思われる。

## II) Gala 僧の使用する Eme-sal

Gordon, op. cit. 2.100.

gala-e bid-da-ni ḡa-ba-an-da-zé-er èm-ga-ša-an-an-na-ga-ša-an-mu  
ba-ra-zi-zi-dè-en-e-še

《gala 僧が、彼の anus を拭いた時に、“私の女主、イナンナ女神に属するものを、刺戟してはいけない”と（言った。）》

上例で、ga-ša-an-an-na は <sup>d</sup>Inanna の、ga-ša-an は nin の Eme-sal 形である。文尾の e-še によって、この Eme-sal 形を含む部分が gala 僧の独白であることが知

られる。

gala (*kalû*) をテーマにした、いわゆる proverb は 2. 99, 2. 101, 2. 102, 2. 103, 2. 106 にも見られるが、2. 99 には eme-sal 形は認められず、また kalam 以外に eme-sal 形を有すべき顕著な語がない。kalam の語は Variant A で ka-na-ág と書かれている。2. 103 の後半部は欠けているが、gala の話しの部分と思われる (cf. -e-še) 箇所に <sup>d</sup>Am-an-ki (= <sup>d</sup>En-ki) の名が見える。2. 102 も破損がひどくて、読み取りが困難である。

以上、資料は鮮少なから、gala と呼ばれる僧侶が一種の宦官であって、Eme-sal を話していたらしいことを推察することが出来る。

#### IV) Eme-al に於ける問題点

Falkenstein は先述せる如く、Eme-sal が Eme-KU の新しい段階を示していることを否定し、また Eme-sal の方言としての性格にも疑義を表明したが、その見解に対する論拠を明示してはいない。

ところが Eme-KU と Eme-sal の音韻対応、その他の諸点を総観すれば理解出来るように、Eme-KU から Eme-sal への変容は、通時的過程に於いて形成された“方言”或いは“口語”、のいずれかにその言語的性格の解明を求められなければならない。

ただ、エメ・サルがいつ頃、そのように明白な対立的形態に形成されたかという Chronology の問題にも関連して、今後闡明されなければならない点は、エメ・サル対照表に於いてエメ・サルと明記されている語がすでに初期王朝期及びその前後の時期の文材に若干明証される事実である：

Eme-sal Vocabulary tablet III. 6)-11)

6) ir	túm	KI.MIN (=ba-ba-lu) KI.MIN (=ha-am-tu)
7) ir	túm	ta-ba-lu KI.MIN
8) ir	túm	le-qu-u KI.MIN
9) ir	túm	šu-lu-u šá BARA. MUNU <sub>4</sub> (=titâpi) KI.MIN
10) ir-ir	túm-túm	KI. MIN ša BĀRA. MUNU <sub>4</sub> ma-ru-u
11) sag-ir-ir	sag-túm-túm	qûl-lu-lu ma-ru-u

Gordon, *Sumerian Proverbs*, 1. 169.

mí-ús-sa-tur ta mu-un-ir-ra-bi  
ur<sub>7</sub>-e ta bí-in-búr-ra-bi

《花婿は“(お父さんは) 何を持って来て下さったのだ”と(言うし),  
花嫁の父は“(婿は) 何を払ったのだ”と(言う)。》

上記の対照表及び用例などからも知られるように, “ir” は eme-sal として特徴づけられている語であるが, この語はすでに初期王朝時代末期の経済文書に於いて確認される(二番目の例は中原与茂九郎先生の御教示によるものである):

1) DP. 83, Col. III 2)-3)

2) gud udu é-barag-ga-ta

3) i-ir<sub>10</sub>-ir<sub>10</sub>-ra-am<sub>6</sub>

《これらの牛と羊を é-barag-ga から運んで来た。》

2) Nikolski No. 91, Rev. IV.

1) šu-nigín : 5 gur-sag-gál, 12 (-sila), DIM<sub>4</sub>-GAZ-gá

2) ÍI

3) i-ir<sub>10</sub>-ir<sub>10</sub>-ra.

《合計: 5 グルサツガル, 12 シラの DIM<sub>4</sub>-GAZ-gá を ÍI が運んで来た。》

3) Nik. No. 21, Col.V, 6) & Col. VII, 1)

Col.V, 6) PA-GÍN ba-ir<sub>10</sub>-ir<sub>10</sub>-ra

Col. VII, 1) šu-nigín 23-lú PA-GÍN ba-ir<sub>10</sub>-ir<sub>10</sub>-ra

4) Nik. No. 133.

Col. I, 1) [ ] -zíd-še 2) ukuš-ne 3) é-gal-la

4) gud-da

Col.II, 1) e-da-kú 2) E-ta 3) MU 4) maškim-bi

Col.III, 1) 5 še gur-sag-gál 2) [ ]

3) é-gal-ta 4) ir<sub>10</sub>-ir<sub>10</sub>-ra-dè 5) i-kú

他の例は I, 5 に示されているエメ・サル形 <sup>d</sup>E-lum (<sup>d</sup>E-lum / <sup>d</sup>Alim, cf. ŠG, <sup>d</sup>E-lum / <sup>d</sup>A-alim ; <sup>d</sup>E-lum に就いては, CT.XV, 10, Rs. 2 etc. ; SK 101, 10=

ZA, NF 14, p. 102など参照) で、すでに Fara 文書に見出すことが出来る。

A. Deimel, *Schultexte aus Fara*, 5) VAT, 12626, Vs. Col. v, 6 (& Rs. v. 2) に在証される <sup>d</sup>E-lum がそれである。これへの注記 (op. cit. 8\*, c) として、ダイメル教授は „Das eme-sal ist also jedenfalls schon sehr alt“ と敍べておられるが、この結論はいささか尚早で、同泥章に於いて、<sup>d</sup>En-líl (Vs. Col. I, 1 & Rs. Col. I, 1), <sup>d</sup>En-ki (Vs. Col. II, 2 & Rs. Col. II, 2) 及び nin をその名の一部とする神名が、その eme-sal 形で書かれていない事実に注意しなければならない。

Falkenstein 教授の否定的な見解も、このような事実に拠って表明されたかと思われるが、上掲の二語に就いては種々の推論が可能で、いずれともには断定出来ない。問題になる他の例は同じく Fara 文書に見出される (本例も中原先生の御指摘による)。

R. Jestin, *Tablettes Sumériennes de Šuruppak* の No. 411 泥章に見られる šu gá-sum (Col. I, 4) 及び No. 630, Rs. Col. I, 1 (楔形文字の手写テキストは載せられていない, cf. p. 12) の šu gá-ti がそれで、この例がとくに興味を惹くのは, III. 175)–176) との対比に於いてである :

175) gá	ma	ia-[-si]
176) gá-ba-zé-è-m	ma-an-sum	id-dì-[-nam]

Jestin は上例の šu gá-sum, šu gá-ti を šu mà-sum, šu mà-ti と表記し、Prefix ba- との比接を試みたが、首肯出来ない。

当然、Lagaš 文書に於ける šu ma-sum と比較さるべき表現であるが、その意義の検討に就いては他日を期すことにしたい。

第二の問題点は、音韻対比に関する問題である。前稿では /g/ 及び /g̃/ の Final (及び Initial) position に於ける Eme-KU と Eme-sal の音韻対応の類推から、Medial (及び Initial) position の “g” を、そのいずれかに措定し、論じてきた。例えば、Eme-KU の gál [ga-al] と gal [ga-al] は Eme-sal でそれぞれ ma-al と gal に対応するので、gál はその初音として /g̃/ を、gal は /g/ を有するものと措定した。さいわい、この二語の場合は、音節表記を用いている Boğazköy 発見の資料によって、その音韻のいずれであるかを確証することが出来るが<sup>1)</sup>、多くの語はその明証を得ることが出来ない。

エメ・サルの研究 (2)

註1) A. Falkenstein, *Sumerische Beschwörungen aus Boğazköy* (=ZA 45 [1939], p. 8-41)  
Kol. I, 2) ~ i-gi-ḫu-ul-gá-al ~  
Kol. II, 14) ka-al-ga-al [……………]  
cf. Kol. I, 13) i-ni-im-gá-ar [註終]

たとえば, Eannatum の Geierstele に見える da-gal の表記がそのような疑問を  
起させる :

Ob. Col. XX, 16.

16) da-rí da-gal-la-šè 17) ki-sur-ra- 18) <sup>d</sup>Nin-gír-su-ka-ke<sub>4</sub> 19) ba-  
ra-mu-bal-e

da-rí は du-rí-šè (cf. ŠL, 206, 59) とともに表記される如くアッカド語の *dāru* (ewig,  
dauernd) に由来する外来語で, u<sub>4</sub>-da-rí-šè (UET, I, 118 etc. /u<sub>4</sub>-sud-du-šè,  
ibid. 141 etc.) 或いは da-rí-šè と同じ表現と考えられ, da-gal-la-šè は恐らく  
dagal-la-šè の音節表記と考えられる。dagal はエメ・サルで da-ma-al に移行して  
いるので, E. Sollberger は da-ḡal-la-šè と修正表記しているけれども (Système,  
p. 166), 同氏の Corpus には当然ながら gal の楔形文字が使用されている。

つまり, エメ・サル形 da-ma-al から推定される dagal の Eme-KU 形は /dagal/  
すなわち \*da-ḡál なのであるが, エアンナトゥムの銘辞は明白に da-gal と表記され  
ていて, われわれの推定とは一致しないのである。従って, この例を da-gal = šu-ú-tú  
„Süden“ (SL, 335, 101) 或いは, dagal に対するシュメール人の民間語源的解釈<sup>1)</sup>と  
看做さない限り, この疑問は深刻であろう。

註1) dagal 《広い》は da-ḡál 《側面がある》と分析されるが, シュメール人はむしろこれを,  
da-gal 《大きい側面》と理解したとする解釈である。〔註終〕

他の例は, Chicago Grammatical Texts (=MSL, IV, p. 79-113) に見出される :

OBT, VIII.

13) [g]á-nam-ma-an-šè		[at-la-ka]š-šum
14) ga-àm-ma-ši-gin		lu-ut-tál-kaš-šum
15) ḫé-im-ma-ši-gin		li-it-tál-kaš-šum

- |                       |  |                         |
|-----------------------|--|-------------------------|
| 16) gá-nam-mu-še      |  | at-la-kam a-na ši-ri-ia |
| 17) ga-àm-mu-e-ši-gin |  | lu-ut-tál-ka-ak-ku[m]   |
| 18) ḥé-im-mu-e-ši-gin |  | li-tál-ka-ak-kum        |

この他に, 99)–101), 102)–104), 108)–110) etc. を指摘出来るが, これらの例で gin (或いは du : 195)–198) etc.) が, 二人称に対する命令形で, gá-na (m) と表記されていて, われわれの注意を惹く。19), 22) にはそれぞれ, gin-na, gin-na-an-「še」の形が見えるけれども, 上例は一応, \*gin-a > ḡá-na の措定を求めている。A. Poebel は HGT 25, Cols. I 31, II 30 に見られる gá-na を Eme-sal 形 mà-nu と理解し, Gudea, Cyl. A (III, 22 & 23 etc.) に見える Exhortative particle ga-na 同様, 起源的には命令形 \*gin-a に来由すると説いている (*The Sumerian prefix forms e- and i-*, p. 5)。

しかしながら, Eme-KU 形としての \*ḡin/\*ḡen (cf. e-gen-na-a, Nik. 149, IV, 1 etc.) の措定は, 当然そのエメ・サルの対応形としての \*me-en を予測せしめるが, そのようなエメ・サル形は在証されなくなり, 従って, 矢張り \*gin-a > gá-na (或いは mà-na) の可能性が問題にされなければならなくなり, 従来の考え方に一抹の不安を与える。なお ga-na の用例に就いては, Sollberger, *Selected Texts from American Collections*, No. 3 (=JCS, Vol. X, No. 1 [1956]) 及び Chiera, SRT. No. 5, Rs. (32 & 47–48) など参照。

第三の問題点は, Eme-sal Vocabulary Tablets の可信性の問題であるが, 全体として信憑性は高く問題にすべき点は見当たらないが, III, (175)–177) の対比は疑問で, 少なくとも III, 177) の比接にはバビロニア人の錯誤を認めなければならないであろう:

177) in-ga-da-te | im-ma-da-te | iṭ-te<sub>4</sub>-「ha」-[a]

詳しくは, 『言語研究』46号所収予定の拙論 “Babylonian Grammatical Texts に就いて” を参照されたい。

### <お わ り に>

以上, Eme-sal に関する卑見はだいたいに述べ終えたのであるが, 十分に論じつくしたとは思えないし, 書き落した事項も多い。

とりわけ, エメ・サルの言語的性格に就いては, 意に満たない個所が多く, 別に細叙と再論の機会を待つことにしたい。

(筆者は神戸外国語大学講師)

エメ・サルの研究 (2)

〔付記〕 本稿は本誌 No 10, pp. 55—92 所載の拙稿“エメサルの研究 (1)” につづいてその終篇をなすものであるが、就中、前号ではⅡ本論A) Ⅳ) 論結までを掲載したので、本号ではⅡ本論B) 以下を掲載していただくこととする。なお、拙稿全体の構成は下のとおりである。

<はじめに>

I 序 論

II 本 論

A) Eme-KU と Eme-sal との比較研究。

I) Eme-sal 研究資料の所在。

II) Eme-KU と Eme-sal の子音対応。

III) Eme-KU と Eme-sal の母音対応。

IV) 論 結

B) Eme-sal の言語的性格。

I) Eme-sal に於ける異質性。

II) 術語としての、Eme-KU, Eme-sal。

III) 文学テキストに於ける Eme-sal。

i) 女性語としての Eme-sal。

ii) Gala 僧の使用する Eme-sal。

IV) Eme-sal に於ける問題点。

<おわりに>

〔1963年4月〕